

It Lives Here

ここに生きる



商品を開発し提供しているのも、当園の特徴の一つです。例えば、当園のイチゴ狩りは、ファミリー層が楽しみながら直接農業に触れられる機会であると考え、日本で初めて「時間無制限、食べ放題のイチゴ狩り」というスタイルを始め、農林水産省のホームページでも紹介されました。

また農家初のバウムクーヘン専門店「ファームクーヘン」は、モンドセレクション5年連続金賞受賞をはじめ、バウムクーヘン発祥のドイツの新聞でも取り上げられるほど高い評価を受け、



PROFILE

農業法人
深作農園有限会社
代表取締役
深作 勝己さん
FUKASAKU Katsumi

100年続く農家の6代目として

2006年 明治大学農学部農業経済学科（現在の食料環境政策学科）卒業

深作農園

<https://fukasaku.com/>

ファームクーヘンファカサク

<https://farmkuchen.com/>

LE・FUKASAKU

<https://le-fukasaku.com>



茨城県は全国有数の農業県で、中でも鉾田市は「菜果の国」と称される野菜生産日本一を誇る地域です。農業法人深作農園有限会社は、その鉾田市で100年以上続く農家で、私は6代目園主を務めています。幼い頃から、父に「お前は農業をやるんだぞ!」と言われ、メロンやイチゴ栽培の手伝いをして育ちました。徐々に「農家の跡取り」としての意識が芽生え、明治大学農学部在籍する頃には6代目の覚悟が固まっていたように思います。

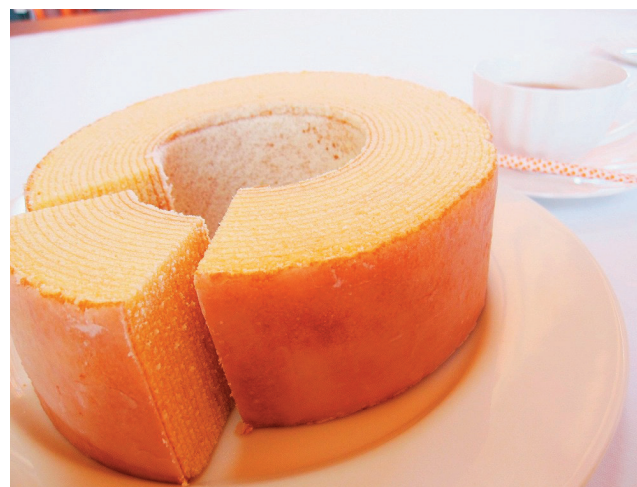
在学中は専門的に農業を学びましたが、その中でも特にグリーン・ツーリズム（※1）には、大きな影響を受けました。視察で訪問したドイツでは「農村と都市の共生」という考え方が社会に広く普及しており、「豊かな農村地域の自然や文化を、都市部の人と共に守る」という発想は大きな刺激となりました。農業は農産物をつくるだけでなく、社会におけるさまざまな役割を担っていることを再認識し、改めて農業と社会との関わりなどについて問題意識を持つようになりました。この

気付きがその後の深作農園の成長の原点であり、キーファクターになったと言えるかもしれません。

深作農園は、メロン、イチゴの栽培面積では全国トップクラスの規模を誇り、農園全体では、1770a、東京ドーム3・8個分の広さです。農業生産で最も大切に行っているのは「健康な土づくり」です。長年の経験と実績、さらに最新農業を取り入れた独自の「深作農法」によって当園で栽培された野菜や果実は、生命力溢れる美味しい農産物として、栄養価を評価するコンテストで1位を獲得する他、多くの賞を頂いています。

生産した農産物は、自社直売所で販売しており、地元はもちろん東京からもお客さまが多数来園されています。コロナ禍では、インターネットによる通信販売の売り上げが伸びており、それと共に当園の知名度も全国的に高まったように感じます。

農家の基本である「美味しく、栄養価の高い、生命力溢れる野菜づくり」を大切にしながら、数々のサービスや



ファームクーヘン

茨城県では人気の土産として定着しています。

さらに6次産業化（※2）の取り組みとして、農園のメロン、イチゴを使ったスイーツの工房とカフェを農園内に設けました。旬の期間だけではなく、一年中当園の農産物を楽しんでいたいただけるようにロールケーキ、プリン、メロンパンなど、人気商品を次々に開発しています。スイーツ工房とカフェは地域のにぎわいづくりに貢献しており、わざわざ他県から足を延ばして来園される方も多数いらっしゃいます。また、雇用創出のため、地域の高校生や大学生を積極的に採用しています。

現在、明治大学農学部の授業「『食料環境政策』総合講座」で、講師として農業の魅力や6次産業化の取り組み、農業の将来についてお話しする機会を頂いています。食糧問題、地球環境問題、SDGsの取り組み等、農業が担う役割が高まる中、後進の育成に努め

ることも責務であると考えています。

2022年1月31日、農業生産者にとって最高の栄誉である「第51回日本農業賞大賞」を受賞いたしました。受賞を励みに、美味しい野菜、果実づくりのために日々精進し、家庭に笑顔を届けられるよう、また地域の活性化、さらには地球環境のために、農業を通じて貢献をしていきたいと考えています。

※1 グリーン・ツーリズム：農村地域に滞在し、自然、文化、人々との交流を図る余暇活動

※2 6次産業：農林漁業者が、農産物などの価値を高めるため、自ら加工や販売に取り組む産業